この結果は一定時間間隔で餌場に見ることのできる全ての個体を計測した値にもとづくものであるが，同時に餌場の中心部に一定の地域を設定し，その範囲内にある個体数の計測も行なった。この2つの数値から推測される群れの大きさを，測定の時間別に示すと第3表のようになる。

この結果は，時間や餌の撒き方によって，餌場における個体の集中度が異なるためであると思われる。

これらの研究は，昨年同様，明星大学比較心理学研究会の学生諸君の協力によって行なわれたものである。

3. 研 究 会

行動観察の基本的方法と定量化の問題

期日：第1回　1971年5月24日
　　第2回　〃　7月19日
　　第3回　〃　9月11日
　　第4回　〃　11月20日
　　第5回　1972年3月10日

参加者（固定メンバーのみ）：

森明雄，杈本知郎（以上京大・自然人類），乗越皓司，川辺寿美子（以上大市大・生物），水原洋城，都守淳夫（以上JMC），糸魚川直祐，山口勝機，藤井尚教，杉野欽吾，南徹弘，黒川多嘉子，八島多恵子，鵜飼信行，曽我部宏（以上阪大・心理），浅見千鶴子（お茶の水女大），伊藤位一（藤沢薬品），室伏靖子，渡辺允子，浅野俊夫，小山直樹，西邨頭達，三戸梅代（以上京大・霊長研）

以上の他に所外および所内より数名が随時参加された。

開催の契機とテーマ：

この研究会をもつに至った契機とテーマの設定の理由はつぎのようなものである。まず46年度設定課題「主としてニホンザルを対象とした行動の研究」では調査や観察の活動と平行して研究会がもたれるべきであるという意見がこの設定課題に関係した所内外の研究者の間であり，その際テーマは行動研究の方法論に関するものが適当であろうということであった(霊長類研究所年報 vol. 1, p. 89-92)。つぎに所外から阪大・心理学研究室の数名の方が「ニホンザル行動観察の方法—とくに集団と個体を対象とした場合の行動類型について」という題目で研究会を申請され，浅見千鶴子氏もほぼ同様の内容で研究会を希望された。このように行動に関する研究会を開くことは多くの人の希望からでたものである。この研究会の題目は所内の関係者で決められたが研究会の内容と進行の仕方は参加者全員が集まったところで決めていくことにした。

研究会の内容と進行：

第1回では西邨・浅野が「定量化」をめぐってつぎのような発表をした。

①西邨：野外および実験室における個体の行動および個体関係の recording, scoring および analysis の概観

②浅野：とくに Jensen et al. の方法論の紹介

これら2つの発表につづくディスカスの後，今後の会をどうやるかが話し合われた。その結果を要約すると，1）基本的な方法論の検討が重要であることの再確認，2）行動の研究では比較のための standard がはっきりしていない。私たちは共通の standard を求めて努力すべきであり，定量化はその1つである，3）しかし，方法はできるだけ分散している方がよい，4）今年は「定量化」というようにテーマをせまくとらず，個人の現在かかえている問題をひとわたり出してもらい，それを材料に会をすすめていくなかから共通のテーマを追いかけよう。会の進行形式は今回と同じく2つの発表とそれにつづくディスカスということでよい。

第2回以後の発表者と題目はつぎのようであった。

第2回
①水原：馬のり行動の発達
②乗越：ピーナッ，food getting 状況下でみられる野生ニホンザルの行動特性の群れ間比較

第3回
①都守：ニホンザルの性行動を観察して
②藤井：勝山野生集団の個体関係

第4回
①川辺：タイワンザル母子のコミュニケーションパターン—研究の方法とそのデータ処理，とくに生後1～2カ月のコドモと母親の関係について
②黒川：餌場退去時における勝山集団の分断操作実験

第5回
①室伏：サル仲間による社会的認知から共通の尺度を推定できるか
②杈本：交尾期におけるオス・メス関係—オスとメスの出会いより交尾に至るまでの行動の記載とそこに含まれる信号の明確化

研究会を了えて：

5回にわたる研究会を了えて参加者が等しく抱いた感想は，現在霊長類，それも主としてニホンザルを対象と

して研究している者同士でありながら，考えていること，やっていることにかなりのちがいがありそうだということだろう。これは例えば発表や自己紹介の際「何故そういうことをするのか」，「そういうことをすることによって何をするのか」という質問がくり返し出されそれにつづくやりとりが十分にかみ合ったものとならなかったということに端的に現われている。このちがいが何かということを明確に指摘することはできないが，参加者を見わたせば各人がこれまで属してきた分野（例えば心理学，生態学）や研究グループのちがい，実際に仕事をする場のちがい（例えば実験室と野外），ある仕事をするようになってからの年月や発展度合のちがいは明瞭であるからちがいがあるのは当然だといえよう。

私たちはこのちがいはある程度予想していた。いや，ちがいの中から行動研究の新らしい面を拓く一各人の研究において，そしてその結果が全体の発展になるということで一ことを目的としてこの研究会をもったともいえる。最後の研究会（第5回）の反省では，「発表をする人は introduction の部分をできるだけていねいにやって欲しい」という注文が数人から出た。発表者がこのことを実行すると同時に，質問する人も自分と相手の立場をより考えながらそれをすることによってディスカスはよりよくかみ合い，所期の目的達成により近ずくだろう。

第1回の研究会で決めた2つの方針，「各人がかかえている問題を出し合う」，「共通のテーマを追う」のうち後者については実際にはあまりできなかった。しかしそれを実現する基盤は5回の研究会を通じてかなりできたように思われる。それはまず参加者相互の理解がすすみコミュニケーションがよくなったからである。つぎに参加者は相互の立場がかなり異なっていても話題の中心は大体つぎのように要約されるからである。行動の観察を通じて個と集団を知ること，または個と個，個と集団の関係を通じてみられる行動の法則性の解明およびその過程で常に重要な方法論の検討。この研究会は今年度も行なわれるが，前年度よりも共通のテーマを追うことをより積極的にするつもりである。

（文責　西郷頭達）

第Ⅱ回ホミニゼーション研究会

期日：1972年1月12～13日

参加者：

第1部　言語の起源・心理からみたヒト化の問題

司会　藤岡喜愛

行動にみられる霊長類のコミュニケーションの進化　森　明雄

未開民族の心理　原　ひろ子

第1部討論

第2部　生態学的にみたヒト化の問題

司会　伊藤嘉昭

霊長類の社会進化について　水原洋城

生息環境からみたヒト化の過程　鈴木　晃

古人類の生活様式とヒト化の問題　渡辺　仁

第2部討論

第3部　系統進化におけるヒト化の問題

司会　徳田御稔

歯からみた Hominidae の系統関係　北原　隆

霊長類の系統進化　岩本光雄

古生物地理からみたヒト化の問題　和田一雄

Australopithecus 以後の編年と進化　渡辺直経

第3部討論

第4部　ヒト化現象の諸問題

司会　香原志勢

直立二足歩行の起源について　富田守・渡辺毅

家畜化現象とヒトの進化　江原昭善

第4部討論

第5部　総合討論

司会　今西錦司

人類の諸現象にかかわりをもつ研究者なら，誰しもその起源成因の解明に多大の興味と関心を有することだろう。それは，たとえば，これまでも到るところで，それぞれの専門的立場で，この問題を中心に，各自の意見が述べられ，あるいは体系化が試みられているのをみても明らかである。とはいうものの，各専門領域をこえて，情報を交換し合うには限度があり，そのような意味で，Hominisation そのものを真正面に据えて，広く研究者を統合し，この問題について討論し，問題点を掘り下げ，いくつかの working group を結成して，研究を促進させる研究会があってもよいと思われる。

ところが，綜合性を不可欠とし，自然科学者としては，むしろ不慣れな演繹的方法を駆使する必要があるようなことが主たる理由と思われるが，このような試みは国外は別として，国内では絶えて存在しなかった。

このような情況のもとで，どのような研究者が，どのような点で，どのような関心を有しているのか，また，今後この課題をいかに進めるべきかを，背踏みの意味も含めて開催されたのが，第1回ホミニゼーション研究会であった（霊長類研究所年報第1巻，p.93）。

ところが，世話係の予想以上に，活発な討論が展開されたばかりでなく，今後の宿題として，多くの要望や課題が寄せられた。これらを中心にして企画されたのが，

第2回ホミニゼーション研究会である。プログラム編成に際して，費用・収容人員等の関係で，当初から大きな制約を受け，世話係（江原・鈴木・渡辺）としては，不充分な点は，さらに今後に期待せざるを得なかった。

ただ，これら討論の結果を，参加者の大方の希望を満たして霊長類研究所年報第2巻に，ほぼその大略を収録できたことは，世話係としては，大きな喜びと慰めとなった。同時に，その実現に際しては，全研究所員が多大の予算的犠牲をかえりみず，支持してくれた結果であり，出版委員会諸氏の尽力によるものであって，研究会参加者全員ならびに世話係として，心から感謝の意を表したい。

（文責　江原昭善）

ニホンザルの行動の個体性について

期　日：1972年3月12日～13日

参加者：

所外：浅見千鶴子，生沢雅夫，糸魚川直祐，黒川多嘉子，杉野欽吾，鈴木延夫，曽我部宏，乗越晧司，藤井尚教，藤岡喜愛，山口勝機，他数名

所内：大沢秀行，川村俊蔵，小山直樹，杉山幸丸，西郷頭逸，室伏靖子

ニホンザルの社会行動に関し，残された重要課題として，個体性のありかたと，その研究方法をめぐって，円卓会議式の自由討論会として企画された。しかしつぎつぎに変わる場において刹那的に行動するニホンザルには，個体差はみとめえても個体性といえるものはないという意見と，生得的な要素と生後加わった要素（獲得されたものばかりでない）をすべて包み込んだ構造的な個のなかに，単なる個体差にはとどまらないニホンザルなりの行動の恒常性あるいは回帰性のようなものを認める意見とが，のっけから対立し，この問題についてまだ十分な研究的基礎がなく，むしろほとんど手をふれられていないことから，双方とも有効な反論もなしえず，展開を見ないまま時間切れの形で終ってしまった。そのなかで生沢氏による潜在クラス分析法の紹介があり，この方法により計算され類別されたクラスが，例えば知能において，その発達段階に関する従来の知見ともよく一致し，個体差の類別に有効であることが示された。

この討論会は，この度は予想されたほど展開をもたず，失敗という見方もできるが，上述のいずれの立場においても，ニホンザルの個体間の行動上の差異とその形成機序に関して，今後の究明が期待され，対立に結着をつけるだけでなく，霊長類の比較行動学的研究の重要な部面をなしてくることが予見される。連日の討論の緊張で疲労した上で，なお最後まで熱心に討議いただいた参会の皆様に，企画者の一人として御礼を申し上げる。

（文責　川村俊蔵）

海外における霊長類研究の展望

期日：1972年3月9日～10日

参加者：

所外：伊沢紘生，市原実，今西錦司，岡野恒也，亀井節夫，粉川昭平，田隅本生，徳田喜三郎，林勝治，葉山杉夫，宮地伝三郎

所内：江原昭善，大沢済，河合雅雄，川村俊蔵，近藤四郎，杉山幸丸，小山直樹

近年日本から多くの研究者が海外に渡り，各地に現存する霊長類について，生態，社会，形態など多方面にわたる研究活動を行なっている。ところがこれまでかかる研究者たちが一堂に集まって，お互いに学問上の討論，とくに今後の研究に関する学問的展望を話し合う機会はほとんどなかった。そこで海外での研究の経験者たちにできるだけ多く集まっていただくとともに，今後に残された大きな課題と思われる化石霊長類研究の基礎となる関連分野として，化石哺乳類・堆積層・古生態方面で同様に海外研究を行なっている方々，及び系統進化の研究者にも出席をおねがいした。研究会のすすめかたとしては，とくに特定の演者におねがいし講演を行なった上でその内容にそって討論を進める通常の方法をとらず，はじめから円卓式に自由発言による討論形式を採用した。しかし一応の交通整理として，まず現生霊長類について，アジア地区，中南米地区，アフリカ地区の順番に話題を進め，その後化石霊長類をめぐる問題に移り，さいごに全体のしめくくりを行なう形式をとった。

アジア地区については，分布生態学的側面と社会学的な種間差・種内差の問題に論義が集中し，前者については多くの生態系にまたがる種がある反面，種間すみわけが別に存在することにつき意見交換があった。後者については系統進化の基礎の上に比較社会学が成立するが，系統進化に関しまだ未解決点が多いことが指摘され，同時に種内における社会性の変異について，従来の成果とその問題点が語られた。そのほかオランウータンについて，これまでの経験にもとずく今後の研究方法が，研究地点など具体性のある形で話し合われた。

南米に関しては，さいきんの研究状況及び開発により甚大な変化がおこっている状況が報告され，またアフリカとの共通問題である種間混群の実態と，その生態学及び社会学的な問題点につき意見が交わされた。それとは別に，半猿類と普通の広鼻猿類との間に，系統学的な先

後関係についての疑点のあることが指摘され，後者の方がむしろ祖系と考えるべき点が多いとの意見が提出された。

アフリカに関しては，南米と共通の開発のインパクト及び混群問題の他に，従来のチンパンジーを中心とする研究に，グエノン，ゲレザが加えられている状況と，とくに行動量測定からくる生態学的諸問題の解明状況が報告された。それとともに将来の大きな課題として，よりオープンランドに住み，生態学的にも形態学的にも問題の多いピグミーチンパンジーに対し，早くとりかかるべきだという意見が出された。

化石及び堆積層に関しては，これまでのインドのシワリク丘陵・ネパール・マレー半島及びボルネオ方面での研究状況の紹介があり，シワリクから西，イランにかけての，化石包含層の研究計画があり，そこで霊長類化石，とくにラマピテクスなど人類と関係ふかい化石を求めてゆく態勢がとられつつあること，ネパールには数千メートルに及ぶ新生代堆積層のあること，マレー方面ではいわゆる溺谷問題をはじめ，花粉による環境復元，旧石器問題など，ほとんど手つかずであることなど，今後の化石霊長類研究と関連ある重要問題がつぎつぎに提示され，共同作業の必要性が改めて理解された。

この研究会は，予定者のかなりが故障により出席できなかったが，率直な意見交換により，一応の成果を収めたことにつき，この機会に御出席の皆様に対し，企画者の一人として御礼を申し上げる。

（文責　川村俊蔵）

幸島の群れの研究に関する総合的アプローチ

期　日：1971年12月17日～18日

参加者：約20名

研究会の目的：

幸島の群れの研究は1948年から開始され，今までにずいぶん多くの資料が集積されてきた。しかし残念ながら，研究者たちがより集いおのおのの観察資料をめぐって討論するという機会を逸してきた。これは幸島の群れの研究に限らず，ニホンザルの研究についても等しく見られる傾向で，一度，総合化の試みがなされねばならない時がきていると考えられる。

幸島野外観察施設が設置されてから，幸島における研究条件は飛躍的によくなり，長期の研究が可能になった。また研究内容も従来は主として社会学的立場からなされてきたが，現在は環境条件（とくに植生）と生活の関連や生物経済学的側面からアプローチが始められ，また機能と形態との関連という側面から形態学の研究も行なわれつつある。これらの研究の大半は共同利用研究員によってなされているが，幸島の群れを対象に研究を行なっている研究者が一堂に会し，最近の資料を相互交換し，現時点で内包する問題点を明らかにし，群れの全体像を総合的に把握するという必要に迫られている。この研究会はその最初の試みである。また研究内容にのみとどまらず，本施設を最も有効に活用する方法と体制，資料の蓄積方法，今後の研究体制のあり方などについても活発な討議を行なった。

第1日

座長　杉山幸丸（京大，霊長研）

1. 幸島20年の研究史
　河合雅雄・三戸サツエ（京大・霊長研）
2. 給餌による採食行動の変化
　木村光伸，狩野和彦（京大・農・森林生態）
3. サルの活動と摂食の日周期
　岩本俊孝，小野勇一（九大・理・生物）

総合討論

座長　西郷頭述（京大・霊長研）

4. コドモの遊びと会社関係
　三戸梅代（京大・霊長研）
5. グルーミング行動を通じてのコミュニケーション
　森　明雄（京大・理・動物）

総合討論

映　画　(1)ニホンザル　その群れと生態(35分)
　(2)幸島の群れでみられた異常性行動(25分)

座長　渡辺　毅（京大・霊長研）

6. ニホンザルのマニュピュレーションへの一試論
　江原昭善（京大・霊長研）
7. 幸島における形態学的研究について
　岩本光雄（京大・霊長研）
8. ニホンザルの群れの遺伝学的有効サイズの推定
　野沢　謙（京大・霊長研）

総合討論

座長　東　　滋（京大・霊長研）

9. 幸島における研究の進め方について

（文責　河合雅雄）

インド亜大陸における哺乳類相の変遷と地史

話題提供：亀井節夫氏（京大・理・地質）
期　日：1972年3月11日　8：30—10：30
参加者：15名（所員および共同利用研究員）
世話人：インド勉強会

先頃，インド北西部から中近東にかけて地質・考古学的調査をされ，帰国された亀井節夫氏を招き，表記のテーマで小研究会を開いた。霊長類の進化，とくに人類の起原を論ずる際に，避けて通ることのできないインド亜大陸およびその周辺の地質学的変遷と，シワリク丘の地史および哺乳類相の変遷について講演と討論がおこなわれた。なかでも，シワリク出土の Hominidae 化石と Cercopithecidae 化石，その古生態と古植生等に話題は集中した。

当研究所に未だ専門家のいない古霊長類に関しては，「勉強する」という段階のものであったが，世話人の予想を上まわる参加者を得て，有意義な研究会であった。

（文責　杉山幸丸）